

# 橘曙覽

折口信夫

青空文庫



曙覧は文化九年、福井市内屈指の紙商、井手正玄の長男として生れたが、父祖の余沢に浴することをせず、豊かな家産と名跡、家業を悉く異母弟に譲つて、郷里を離れた山里や町はづれに、さゝやかな藁家を構へ、学究歌道に専念した。庶民の子として、これはあるまじき独行であつた。若くして仏教を学び或は窃かに京師に赴いて、頼山陽の高弟児玉三郎（旗山）の塾に入り、呼び返されても、一途にもたげる学究の炎は消えず、江戸に走つて転變の世相に深い感銘を受けた。

雲脚の変幻極まりない時代の姿を、曙覧他界した慶応四年八月前後の北陸辺に關して抽出してみると、同月会津征討越後口総督府

参謀西園寺公望が村松に入り、その翌日長岡藩の反将河井継之助が敗死、同年六月会津征討越後口総督嘉彰親王が征途につかれ、廿七日敦賀に御宿せられ、八月十二日には越後三条に進まれてゐる。その二日前、十日には鹿児島から廻航した西郷隆盛が、柏崎に到着して総督宮に拝謁、新潟に向つてゐる。新代の御光が恰く照り映えようとする直前に、彼は五十七年の生涯を終へたのである。所謂端倪すべからざる時代の波は、彼の在世中ずつと、辺土の領国松平藩をも内外ともに揺り動かしてゐた。この内外多端の時にあつて、古義神道を探求し、嚴たる皇国觀念に徹した彼は、私情に於て藩主破格の厚情に感泣し乍ら、重なる招聘にも応ぜず、藩祿を食まうとしなかつた。橘左大臣諸兄の末裔にして、大君の

直臣なりとの堅い信念を貫き通し、倦みなく藩内武士の血脈を衝いて勤皇観を植ゑ付け、時代に迷ふ福井藩を遂に動かして、勤皇運動に押し出したのだつた。一歌人の業としてこれほどの大業は嘗てない。

松平慶永（春嶽）は、江戸田安家に生れて、斉善のあとを嗣ぎ、福井城に君臨した賢明なる名君であつた。曙覧は一介の町人でありながら、春嶽公の恵みを受け、彼の藁家に藩主自らの来訪を忝なうしたほど、心の繁りがあつた。また福井藩第一の勤皇家にして、明治の御世にも功深かつた中根鞆負（雪江）とも深い友誼の仲だつた。当時のしきたりからすれば、所詮国事を憂ふるに値せぬ地下人でありながら、国学者・歌人であつた許りに士人と交遊

し、復古の情熱を周囲の関係者に注ぎ込んだ。江戸將軍家の親藩であり、將軍に誠意を示すことをよしとする傾向の、未だ多かつた福井藩を、維新の大業に干与させた、藩主並びに中根氏の陰には、蓋し曙覧の意力の注がれたものがあると言つても過言ではない。

しかも、かうした勤皇思想の鼓吹は実に危険な行動だつた。藩主の意の通り動いた橋本左内が、刑死したのを見殺しにするほかなかつた、藩の動向だつたのだ。藩主とは云へ側近の者より、自分の意志が通じなかつた。春嶽の宗家・末家の感を超える勤皇行為、篤胤門に入つて復古運動に走つた雪江、この主従が苦しんだ板挟みの境遇、薩州その他の堪へ難い圧迫にさいなむ苦衷は、曙覧の

心を悲壯なものとしたに違ひない。困難な環境に屈することなく、三百年の習癖で動くことより知らぬ武士に、勤皇の為の啓蒙をい  
ろはから説き諭して行つた。

かくして福井藩の勤皇は、文芸復興の清純な歩みから出発し、復  
古の情熱は古学のつきつめて尖鋭になつた、古歌の形を以て燃え  
立つて来たのだつた。もつて曙覧の偉業に起因したものと断ずる  
訳である。

尊かる天日嗣の広き道 踏まで 狭き道ゆくな。ものゝ夫  
真心といはるべしやは。真まごごろも、正しき道によらで尽さ  
ば

古義古学に疎い蒙昧な士には、こんな歌を示しては、第一義から

緋く事を怠らなかつた。国学の流れを汲む者の間にも、尊皇から攘夷に到る情熱は見えても、討幕の機運は割合薄く、却て江戸讚美の傾向すらある者があつた。これ等阿世の和学者風にも染まず、また佐幕思想の横行する藩内にあつて、左内の先例にもひるまず、曙覧は己れの信念を力限り表白した。

## 示人

スメラギ

天皇は 神にしますぞ。天皇チヨクの勅ミコトとしいはゞ、畏みまつれ

太刀佩くは 何の為ぞも。天皇ミコトの勅ミコトのさきを 畏まむため

唯の歌人、みやび男が突如かうした気魄の歌を叫び出しては導いて行つた。更に左内の手足となつて、密勅事件の裏に活躍した歌弟子、野邨恒見に、

愚にも まどへるものか。大勅 たゞ一道にいたゞきはせでの歌を与へては激励の鞭を打つのだつた。

かういふ風に、風流にことよせては、常に自分の心に蔵せられてゐる耿々の志を弟子達に鼓吹してゐる。此市井の隠士は、その進退に躊躇する武士があると、烈々の気概を以て叱咤する。また大御軍に召されて征討に従軍する弟子達には、はなむけの歌を贈つて、その壮行を祝ふのだつた。

負気なく勅に 背く奴等ヤツコラを 罰めつくして帰れ。日を経ず

大皇キミの勅に 背く奴等の首引抜きて、八つもてかへれ

大皇の勅 頭に戴イサヲきし功績イサヲあらはせ。戦ニハひの場

勅命を奉戴することの光輝に感激してゐる。玉の御声の揺曳を草

莽の身に受け奉るこの心をどり、昂奮は、戦争下の今の我々には殊に共感せられるものだ。この憂国の至情は、反対に挙動を遲疑する者があると、大いに憤激する。軍監付きの要職にあつた野邨某の出入を禁じた事は、その一例だといはれる。

北辺の領国福井にも、ヤガ聽て栄光の瑞兆がきざし染めて来た。もう病床に起つことが出来なくなつた、慶応四年二月十五日、北陸道鎮撫総督高倉永祐の一行が福井に入つた。

ヨステピト(?)

隠

士も、市の大路にハヒ匍匐ならび、をろがみ奉る 雲

の上人

老いの眼をしばたゝき、随喜の涙を流してゐる彼の姿が髣髴とするではないか。これより約半歳後、八月二十八日、「斯の如き古

来未曾有の大御代に遭ひながら、眼前、復古の盛儀大典を見奉るに至らず、況んや、かねての抱負も、將に達するに向はむとして、今日はなく世を去るこそ、返す／＼も口惜しけれ」と歎じて、遂に瞑目した。

終りに、現代短歌の開祖といはれる子規の境地は、夙に曙覧の開墾したものであり、子規また彼の衣鉢をついだこと、曙覧の功が今花咲き実つてゐることを述べて、彼の歌の上へのこした偉業を讃へたい。



## 青空文庫情報

底本：「折口信夫全集 14」中央公論社

1996（平成8）年5月25日初版発行

底本の親本：「東京新聞」

1943（昭和18）年2月26日

初出：「東京新聞」

1943（昭和18）年2月26日

※底本の題名の下に書かれている「[#割り注]昭和十八年二月二十六日「東京新聞」[#割り注終わり]」はファイル末の「初出」欄に移しました。

※この作品は、東京新聞連載「勤王烈士に学べ」の二十八回目として掲載されました。

入力：kompass

校正：門田裕志

2013年1月20日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

# 橘曙覧

折口信夫

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>